

神のことばとの対話

主任司祭 高祖敏明

年間テーマ「神の家のよろこび」の第3回目のセミナーは、「神のことばとの対話」が主題です。教皇フランシスコの使徒的勧告『福音のよろこび』は、「主とその民は、仲介者なしに、無数の方法で対話します」としながらも、「説教は、神とその民の間ですすでに始まっている対話」を再開させるものと、その役割に注目しています。説教は、ことばの典礼と感謝の典礼を内容的に密接につなぐものとして「とくに高い価値があり、聖体拝領前に行われる神とその民の対話の最高の瞬間として、あらゆるカテケージスに勝るものだからです。

今回は、本年9月8日（年間第23主日）の典礼に基づく説教案を紹介し、神との対話を深める一助にしたいと思います。

I. 主とその民は仲介者なしに無数の方法で対話している

- 1) 神のことばとの対話は、神の語り掛けに気づき、それを「聴く」ことから始まる。説教作りも、みことばを味読して神の語り掛けを聴き、対話することから始まる。

例1：預言者となる少年サムエル：主の呼び掛けを聞いて、これに応える⇒対話の始まり

「主は三度サムエルを呼ばれた。サムエルは起きてエリのもとに行き、『お呼びになったので参りました』と言った。エリは少年を呼ばれたのは主であると悟り、サムエルに言った。『戻って寝なさい。もしまた呼びかけられたら、『主よ、お話してください。僕は聞いております』と言いなさい。サムエルは戻って元の場所に寝た。主は来てそこに立たれ、これまでと同じように、サムエルを呼ばれた。『サムエルよ。』サムエルは答えた『どうぞお話してください。僕は聞いております。』主はサムエルに言われた。『見よ、私は、イスラエルに一つのことを行う…。』』（サムエル上3・8-11）。

例2：イエスの弟子たち：呼び掛けを聞きすぐに従う⇒人生の歩みを通しての対話が始まる

「イエスがガリラヤ湖のほとりを歩いておられたとき、二人の兄弟、ペトロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレが、湖で網を打っているのをご覧になった。彼らは漁師だった。イエスは、『私についてきなさい。人間をとる漁師にしよう』と言われた。二人はすぐに網を捨てて従った。そこから進んで、別の二人の兄弟、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネが、父親のゼベダイと一緒に、船の中で網の手入れをしているのをご覧になった。彼らをお呼びになった。この二人もすぐに、船と父親を残してイエスに従った」（マタイ4・18-22）。

2) 神は私たち人間の目には見えず、私たちの力では捉えることのできない方

Q:そういう神と、どのようにして私たち人間は対話できるの？

[参考]:サムエルにはエリの手引きと教示が必要であった。

パウロの主張:神について知り得る事柄はある=神はいつも語り掛けている

「世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます」(ローマ1・20)。

「生きておられる神」を他のものと取り違える私たち人間

「世界とその中の万物を作られた神…は天地の主ですから、手で造った神殿などにはお住みになりません。また、何か足りないことでもあるかのように、人の手によって仕えてもらう必要もありません。すべての人に命と息と、その他すべてのものを与えてくださるのは、この神だからです。神は、一人の人からすべての民族を作り出して地上の至る所に住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。これは人に神を求めさせせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見出すことができるようにということなのです。実際、神は私たち一人ひとりから遠く離れてはおられません。皆さんの内のある詩人たちも、『我らは神の中に生き、動き、存在する』『我らもその子孫である』と、言っている通りです。私たちは神の子孫なのですから、神である方を、人間の技や考えで造った金、銀、石などの像と同じものと考えてはなりません」(使徒言行録17・24-29)。

「…神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえってむなしい思いにふけり、心が鈍くなった…自分では知恵があると吹聴しながら愚かになり、滅びることのない神の栄光を、滅び去る人間や鳥や獣や這うものなどに似せた像と取り替えたのです」(ローマ1・21-23)。

3) イエスは見えざる神の見える姿=神に満ち溢れるものを宿す方=神のことば

「いまだかつて、神を見た者はいない。父の懐にいる独り子である神、この方が神を示されたのである」(ヨハネ1・18)。

イエスのご変容の場面:「ペトロがこう話しているうちに、光り輝く雲が彼らを覆った。すると、『これは私の愛する子、私の心に適う者。これに聞け』という声が雲の中から聞こえた」(マタイ17・5)。

➡神の口から出る一つ一つの言葉:主イエスの言葉、動作、振る舞い、思いや生き方も「神の口から出る一つ一つの言葉」であり、いつも語り掛けている。

★「主とその民は、仲介者なしに、無数の方法で対話」しているという多くの現実がある。

[参考] 「御子は、見えない神の姿であり、すべてのものが造られる前に生まれた方です。天にあるものも地にあるものも…万物は御子によって、御子のために造られました。御子はすべてのものよりも先におられ、すべてのものは御子によって支えられています。また、御子はその体である教会の頭です。御子は初めの者、死者の中から最初に生まれた方です。こうしてすべてのことにおいて第一の者となられたのです。神は、御心のままに、満ち溢れるものを余すところなく御子に宿らせ、その十字架の血によって平和を打ち立て、地にあるものであれ、天にあるものであれ、万物をただ御子によって、ご自分と和解させられました」(コロサイ 1・15—20)。

[参考]「ガリラヤの風かおる丘で」(聞かせてください、みことばを)

- 1 ガリラヤの風薫る丘で 人々に話された 恵みのみ言葉を 私にも聞かせてください
→マタイ 5・1—2「イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。そこでイエスは口を開き、教えられた。」
- 2 嵐の日 波たける海で 弟子たちを諭された 力のみ言葉を 私にも聞かせてください
→マタイ 8・26「イエスは言われた。『なぜ怖がるのか。信仰の薄い者たちよ。』そして起き上がって風と湖とお叱りになると、すっかり凪になった。」
- 3 ゴルゴタの十字架の上で 罪びとを招かれた 救いのみ言葉を 私にも聞かせてください
→ルカ 23・43「(イエスよ、あなたの御国に…私を思い出してください)するとイエスは、『はっきり言うておくが、あなたは今日私と一緒に楽園にいる』と言われた。」
- 4 夕暮れのエマオへの道で 弟子たちに告げられた いのちのみ言葉を 私にも聞かせてください
→ルカ 24・32「二人は『道で話しておられるとき、また聖書を説明してください。私たちが燃えていたのではないか』と語り合った。」

II. 説教はミサの二つの食卓をつなぐ役割を持つ

「いつくしみ深い父よ、みことばといのちのパンで養われた私たちを強めてください。」
(9月8日の拝領祈願を参照) →ミサは、神と出会い、神に育まれる共同体の祈りの場

- 1) ミサを捧げる祭壇は「食卓」という面も持つ
 - ① 神への供え物(いけにえ=犠牲)を捧げ、神からの祝福をいただく祭壇
 - ② イエスの遺言に従って最後の晩餐の記念を行う食卓
- 2) ミサは二つの食卓から構成されており、説教は内容的に両者を深くつなぐ役割を持つ
 - ① 感謝の典礼: パンとぶどう酒の祭儀=最後の晩餐の記念として新しい契約を再現
 - ② ことばの典礼: 「人はパンだけで生きるものではない。神の口から出る一つ一つの言葉で生きる」(マタイ 4・4、その引用元: 申命記 8・3 参照)

[参考]: 「あなたの神、主が導かれたこの40年の荒れ野の旅を思い起こしなさい。

こうして主はあなたを苦しめて試し、あなたの心にあること、即ちご自分の戒めを守るかどうかを知ろうとされた。主はあなたを苦しめ、飢えさせ、あな

たも先祖も味わったことのないマナを食べさせられた。人はパンだけで生きるのではなく、人は主の口から出るすべての言葉によって生きることをあなたに知らせるためであった。この 40 年の間、あなたのまとう着物は古びず、足がはれることもなかった。あなたは、人が自分の子を訓練するように、あなたの神、主があなたを訓練されることを心に留めなさい。あなたの神、主の戒めを守り、主の道を歩み、彼を恐れなさい。あなたの神、主はあなたをよい土地に導き入れようとしておられる」(申命記 8・2-7a)。

→日々の暮らしと、40 年の荒野(人生)の旅を支え、養う糧。よい土地に導くため。

Ⅲ. 9 月 8 日の典礼に基づく説教案の一例

1) 三つの聖書朗読箇所を読む

イザヤ書(35・4-7a)：聞こえない人の耳が開き、口の利けなかった人が喜び歌う

ヤコブの手紙(2・10-5)：神は貧しい人たちを選んで、国を受け継ぐものとなさったではないか

マルコ(7・31-37)：この方は、耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるようにしてくださる(マルコだけが伝える出来事)

→イザヤ書とマルコ福音とが対応し合っていることは、すぐに察知できる。

★福音に「耳が聞こえず舌の回らない人」=人と対話ができない状態にある人が登場

Q：イザヤの預言から見た場合、こうした人物の登場にはどういう意味があるの？

Q：イザヤ書とマルコ福音とが対応し合う中で、ヤコブの手紙の位置づけは何？

2) 説教構想の原案：通常 7 分以下(A4 判 1 枚)にまとめるよう努力している

イザヤの預言：本来はバビロン捕囚の時代(B.C.6世紀)にユダの回復を告げた預言だった。

[背景 1] 新バビロニア王朝のネブカドネツアル 2 世(前 604-562)が前 597 年にエルサレムを陥落させ、ユダ王ヨヤキンと有力者たちをバビロンに連行=第 1 回捕囚

ネブカドネツアル 2 世に擁立されたユダ王ゼデキアがバビロニアに反逆したため、前 586(7)年、再度エルサレムを陥落させ、ゼデキアとユダの人々をバビロンに連行=第 2 回捕囚。その結果、ユダ王国は滅び、バビロニアの属州となる(～539 年)。

この捕囚状態にある人々に対し、「雄々しくあれ、恐れるな…神は来て、あなたたちを救われる」と、主なる神の言葉を告げ、救いが実現する状況を 5 節以下で描き出す

「そのとき、見えない人の目が開き、聞こえない人の耳が開く。そのとき、歩けなかった人が鹿のように踊り上がる。口の利けなかった人が喜び歌う…。」

→預言の実現(539 年にエルサレム帰還、神殿の再建に尽力：捕囚による国家の滅亡と土地の喪失を越えて、民族としての存続を果たし、後に「ユダヤ人」となっていく。

★答唱詩編：イザヤの預言に応えるもの＝「貧しい人のために裁きを行い…神は見えない人の目を開き…逆らう者の企てを砕かれる。」

マルコ：上記5節以下の言葉を、メシア（油注がれた者＝救い主）到来のしるしと見做す
32：「人々は耳が聞こえず舌の回らない人を連れて来」る。

→人と対話ができない状態にある人、神と対話ができない状態にあることを暗示。

「ティルスの地方…シドンを経て…デカポリス地方を通り抜け…ガリラヤ湖に
やって来た」イエス。異邦人の地に住む異邦人＝主なる神を知らない人

「人々は…その上に手を置いて（＝癒して）くださるよう願った。」

33：「この人だけを連れ出し…指をその両耳に入れ、それから唾を付けてその舌に
触れられた」

Q:耳が開くようにと指を両耳に入れるのは分かるが唾を付けて舌に触れる行為は何？

→古代世界では唾は医薬品の役割を果たした。日常でも傷をなめて消毒する例あり。

→魔術では、病気や障害の原因と考えられていた悪霊を追い出すために呪文と共に唾
が用いられた。イエスの場合、「エッフアタ」（マルコ：開けという意味と説明）と言う。

[参考]ベトサイダで盲人を癒す（マルコ8・20-35）

「イエスは盲人の手を取って…その目に唾を付け、両手をその人の上に置いて…
すると、盲人は見えるようになって言った」（23-24）。

生まれつきの盲人を癒す（ヨハネ9・1-12）

イエスは地面に唾をし、唾で土をこねてその人の目にお塗りになった。そして、
『シロアムの池に行って洗いなさい』と言われた。そこで彼は行って洗い、目が見えるようになって帰って来た」（6-7）。

34：「天を仰いで深く息をつき…」

→奇跡をおこなう前の精神的興奮を示す＝サタンの力と戦う時のイエスの
激しい感情を見ることができる。

「その人に向かって『エッフアタ』と言われた。」

→魔術の呪文と違って、意味ある言葉で、権威をもって「開け」と命じる。

35：「すると、たちまち耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話すことができる
ようになった。」＝人との対話、コミュニケーションができるようになった。

→ただし、はっきり話せるようになったこの人が神を讃えるようになったかは不明。

37：人々は口止めされたが、「すっかり驚いて言った。『この方のなさったことはすべて
素晴らしい。耳の聞こえない人を聞こえるようにし、口の利けない人を話せるように
してくださる。』」

→マルコ：ユダの人々のバビロン捕囚からの解放の預言を、救い主到来のしるしと読む
それも、イスラエルの民ばかりでなく異邦人にも行き渡る救いが実現したとして

★「耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話せるようになる」救いは、人との対話・
コミュニケーションのレベルだけでなく、神との対話ができるようになるという意味も。

→アレルヤ唱「イエスは神の国の福音を告げ知らせ、民の病をいやされた」と呼応

Q:ヤコブの手紙のメッセージは、イザヤとマルコの対応する内容とどうつながるの？

ヤコブの手紙のメッセージ：

「私の兄弟たち、栄光に満ちた私たちの主イエス・キリストを信じながら、人を分け隔てしてはなりません」(1)。「立派な身なりの人」⇔「汚らしい服装の貧しい人」

「私の愛する兄弟たち…神は世の貧しい人たちをあえて選んで信仰に富ませ、ご自身を愛する者に約束された国を、受け継ぐ者となさったではありませんか」(5)。

➔「世の貧しい人」である私たち自身が信仰を恵まれ、神の約束を受け継ぐ者にされた＝「人を分け隔てすること」＝「自分たちの中で差別をし、誤った考えに基づいて判断を下す」ことは、栄光に満ちた私たちの主イエス・キリストを信じることに相いれない。

★主イエス・キリストの福音が身につけていない＝福音が心に達して(届いて)いないつまり、「聞こえていない」。だから舌が回らない＝判断と行動が伴わない、と解せる。

IV. 結び：みことばの典礼と感謝の典礼とはどうつながっているの？

以上の朗読箇所メッセージを受けて、集会祈願では次のように祈る：

「聖なる父よ、あなたはキリストによって私たちを贖い、神の子供としてくださいます。あなたの愛を受けた民を顧み、御子を信じる人々に、真の自由と永遠の喜びをお与えください。」

ヤコブは、非常に具体的で実践的な教えを述べて、主イエス・キリストを信じる者がキリストの贖い（その記念祭儀が感謝の典礼）によって神を愛する者（神の子）＝すでに「耳が開き、舌のもつれが解け、はっきり話せるようになる」救い（約束された国）に与っていること＝「まことの自由と永遠の喜びに」与っていることを想起させる。

共同祈願の例文も、本日の朗読箇所の趣旨を踏まえた祈りとして例示されている：

- ・キリストとの出会いによって罪のやみから解放された私たちが、神の国に生きる喜びを、行いをもって証しすることができますように。
- ・分け隔てなく、人を慈しまれるあなたのみ心に気づかせてください。人の世界で生まれる心の壁や偏見を乗り越えることができますように。

共同祈願の結びの祈りにも反映している：

「父である神よ、すべての人に注がれる、あなたの慈しみに感謝して祈ります。御子キリストによって明らかにされた救いの福音を、私たちがすべての人に伝えていけますように。」

拝領祈願も、みことばの典礼と感謝の典礼のつながりを強調しつつ、救いの深化を祈る：

「いつくしみ深い父よ、みことばといのちのパンで養われた私たちを強め…御ひとり子の豊かな賜物で満たされ、いつもその命に生きることができますように。」

★説教は、その日の典礼に基づき、ことばの典礼と感謝の典礼を内容的に密接につなぐもので、神と民がすでに始めている対話を再開させる役割ももつ。